

国道沿いの県立公園。まだ夜が明けたばかり。

公園の駐車場は開いている。疎らな車。隆は時計を見る。30分単位の料金の余り時間まで、時間がある。車の中へ入り、ラジオをつける。ラジオをぼんやりと聴く。急いでやるべきことはなにもない。ゆっくりとジョギングしている女性を通り過ぎる。雨が降り始める。バックミラーに、雨に濡れた人影。さつき走りすぎていった女性。彼女は、いったん通り過ぎ、戻ってきて、車に近づいてくる。

彼女は、車の窓ガラスをノックする。隆は、窓を開ける。

「乗っけてくんない?」

「雨はすぐ止むよ」

「じゃあ、雨宿りさせよ。暇そうだよ」



雨は止まない。彼女はくしゃみをする。隆はハンカチを貸す。彼女は小さなハンカチで、髪を拭

く。

隆は座席の下を探る。黒いところもり傘を取り出す。

「ほら。傘があった」

「もう歩きたくないの」

隆は、傘を彼女に差し出す。

「この前、マミラへんで、誘拐があったの、ニュースで聞かなかった？ この公園のそばで、頭と手足がばらばらにされた死体が見つかったっていうやつ。彼女は、歩きたくても歩けなくなってしまった」

彼女は窓から空を見上げる。

「それなら、知ってるわ。あなたは、マミラへんで、見知らぬ女性を乗せた車の運転手が、首を切られて、血まみれで道路に放り出されたのって、知ってる？」

ラジオが、ニュースで自殺者の統計を知らせ、天気予報になり、大雨になると、注意を促している。



老婆がレインコートを着て、車の付いた買い物かごを押しながら車の前を通り過ぎる。立ち止まりばんやりとし、振り返り、車の彼女と目が合う。老婆はにこりと笑い、何か言う。

「何て言ってるんだらう？」

彼女は、傘をさし、車を出る。老婆に近づき、何かを話す。老婆はうなづいて歩き出す。

彼女は車に戻って来る。

「この辺にお魚を売っている所ありませんですか
って訊かれちゃった」

雨が強くなる。

「どうしよう、あのおばあさん」

彼女はあわてて傘をさして、車を飛び出して行く。



隆は駐車料金が上がる寸前まで駐車場にいる。

時間になると、ゆっくりと駐車場を出る。駐車場

を出ると、国道の信号は赤。信号が青になってもその場に止まっている。駐車場から、車が出てきて、隆は、車を国道へ出す。



名美は黒いこうもり傘をさして、老婆を捜す。老婆は見つからない。駐車場に戻る。車はいなくなっている。公園を歩く。小さな池の前にベンチがある。池には魚が泳いでいる。雨が池の水面に降り注ぐ。しょうがない。雨の日はしょうがない。名美は傘をたたみ、魚を釣る。黒いこうもり傘が引き上げた魚は雨の中。名美は屈伸をし、駆け出す。